

自己規律の欠如

——《先延ばしの技術》とは何か

カイ・ファン・アイケルス

訳：田中 均

本稿は、ベルリン自由大学特別研究領域「パフォーマンスの諸文化」研究員カイ・ファン・アイケルス氏が2009年12月9日に山口大学人文学部において行った講演の日本語訳である。講演会は、「平和研究と文化研究の融合と多文化共生・理解の方途に関する研究プロジェクト」（代表：瀬戸厚教授）の主催によって行われ、山口大学人文学部異文化交流研究施設および山口大学人文学部哲学・思想講座の後援を得た。

私に取り組もうとする自己規律というテーマは、とくに英国の社会学者ニコラス・ローズとドイツの社会学者ウルリヒ・ブレックリングがミシェル・フーコーの「統治化」^{ゲベルヌマンタリジールング}概念に則して批判的に分析したもので、自己を管理経営の対象とみなすことである。したがってこれは、人間理解（そしてそれは言い換えると、常にまた人間の自己理解でもある）を、労働、生産、価値創造を組織化する特定の仕方と結びつけることである。私は特にこのテーマにいわば裏側から接近し、自己規律の欠如について検討しよう。

20世紀後期および21世紀のいわゆるリベラルな社会におけるダイナミックで開かれたコミュニティは、帰属関係についてのハードで明示的な基準をほとんど提示しない。そしてそれゆえに、排除について語ることや、排除の効果を確認することが困難になっている。しかしこうしたコミュニティには、自己規律を持たない者に対する明らかな社会的な排除が存在し、これはドイツに関しては、1990年代中頃からますます明確に表明されて

もいる。ここで問題なのはもはや「下層階級」ではない。つまり、その全体がブルジョワ社会によって社会生活への参加能力を拒否されると言われるような、ある等質な階級ではない。たしかにこの言葉はドイツではメディアを通じていまだに、あるいは再び漂っているし、かつての時代には多かれ少なかれ本質主義的で道徳主義的な議論において論じられたのだが。ここで問題なのは、本当に共通する分母を欠いているために、漠然ととにかくやり遂げられないとしか言い換えられないような人々から成る、断片的で分散したグループである。これらの人々は、自己の経営管理、つまり社会的な自己を維持し可能な限り最大化するような統治を行うために必要な、最低限の自己規律さえ示さないのだが、いずれにせよこのことは知覚されるのであり、私はこの知覚に取り組みたいのである。

こうした、自己規律を持たない者の多様性は一方で周知の「問題事例」を含んでおり、その問題は自己規律という視点から再解釈される。「斡旋不可能」とみなされる長期失業

者、中毒患者、臨床の内側にある（つまり、制度的に許容されていない）躁鬱的な逸脱を伴う境界パーソナリティー、悪名高い不登校児や職業実習の頑固な忌避者、限度を超えた過剰債務者などである。しかし、このような詳細なプロフィールの他に、ますます多くの人々が加わってくる。それは「勝手に振る舞って」いるか、または社会的能力への無関心ゆえに欠陥を持つと何らかの仕方で疑われる人々である。教育学や児童・青年心理学は、この疑惑が自己強化するダイナミズムに巻き込まれている。教育制度の代表者は児童・生徒に対して、彼らの個人的な生活が、共同の学習、職業実習、あるいは職業の世界に適合するためのごく基本的なレベルの組織化にさえ全く到達していないという証拠を示す。

このように人格の多様性は分散しているが、こうした価値評価が示しているのは、社会は、これらの自己規律を持たないとみなされる人々に関して寛容の限界に突き当たるといことである。これが最も明確になるのはテレビ番組のような大衆的な形式であり、実際、自己規律を持たない者はドイツの午後と夕方の娯楽番組の新しい主役になっている。民放の番組にあふれているのは、実習職への応募を引き延ばしてポップスターになることを夢見るが、それに必要な苦労については明らかにほんの少しも考えていない十代の若者を見せるショーである。また取材班は、返済滞納者をまともな生活に戻すために、少額の分割払いを辛抱強く説得する債務コンサルタントや、気が重いながらも片付けられない住人を荒れ果てた住居から追い出す裁判執行官に同行する。ストリートのケース・ワーカーは、家庭から切り離された子供を再び家族に「統合」すれば、ホームレスと物乞い生活からの救済者になる。ただしいかなる対立がそ

もそも家出のきっかけだったのかは決して知らされない。連邦労働局の職員は、最近では「顧客」に給付するだけでなく教育もしなければならないが、ほほえみながら「要求される責任を果たさないために罰則を科すのはもちろんつらいことですが、怠惰に対して有効なのは罰則だけということも多いのです」と語る。

自己規律の欠如に関する専門的な議論の場合は、常識的^{コモンセンス}に正当とみなされる要求に応えないことへの攻撃が、たいていはいくらか巧妙に、援助の意志や義務感という口調で覆い隠されている。実際に、過去二十年間のうちに、一度致命的な仕方でドロップ・アウトしたかに見える人々が自己規律を取り戻すのを助ける数多くの新しい援助プログラムが成立した。その際に援助実績についての攻撃は間接的に強まる。なぜなら、国と自治体が税金から支出しているプログラムは、目に見える成果を出すようにという圧力を受けており、この圧力を援助対象者へと委譲しているからである。ゆえにこの援助措置に関してはある「プラグマティズム」が確立されており、その結果、何か効果を示すものであれば、このリベラルな社会の基本的価値に反するものでさえも許容される。人々はまさにこのリベラルな社会の内部で再び十全な価値のあるメンバーとして生きるべきであるにもかかわらず。

これは特に、悪名高い教育的新兵訓練^{フートキャンプ}（または理想的なテレビの題材である）がすでにほとんど象徴しているような、外的な規律の投入にあてはまる。規律化が最近では自己規律の平面上にあることは強調すべき事実である。ドイツの教育学者ベルンハルト・ビュープの本『規律を讀んで』と、この本がドイツで引き起こした論争は、「規律への回帰」というトレンドを表しているように見え

る。しかし実際には、最も反動的であり、反権威主義教育を敵視する発言さえ、自己規律の習得を準備するか、それが失敗した場合には取り戻すための外的援助として規律を提示している。基準はもはや秩序それ自体ではなく、個人の能力である。この概念は、自己表現のいわば循環的確認のループのうちに自尊心を取り囲む。社会科学におけるおそらく最も確かな定義によれば、能力とは「能力表現能力」である（これが的確なのは、定義されるべきものが定義の中に——しかも二度も——現れる、まさにそのためである）。

自己自身の確認のための虚構的条件としての、能力の循環的性質は、同時に、自己規律の欠如という問題へのいくらか異なるアプローチのための最初の手がかりになるだろう。以下で私はこれを短く素描したい。なぜなら、能力とは、やや極端な言い方をすれば、過大な要求をされていないという見かけを能動的に維持することだからである。しかもこの世界は、他方で社会学的記述が誤解の余地なく明確にしているように、まさに個人に過大な要求をしている世界である。技術的にも、職業的にも、情動的にも、そして社会的にも。能力をほとんど検証不要の社会的・経済的価値にするこの状況にとって特徴的なことは、処理すべきものの過剰について広く普及している知識が個人の役には立たないということである。過剰要求は普遍的には確認できるが、それを個人が認めることはできない。それはありえない。なぜなら、もし認めれば社会システムが崩壊するだろうからである。社会は自らが機能するために、主観を強制して、非常に少ない（そして非常に短い）例外を除いて過剰さという客観的事実を否認させる。システムの逆説性の修正を誰もがわ

が身に引き受けねばならない。ゆえに、あきらめることは拒絶される。あきらめから生じたり、あきらめに至ったりするように見えるならば、あらゆる形の単なる中止や怠慢も拒絶される。

外的な規律から、規律訓練措置によって支援・修復されるだけの自己規律への移行は、さらに、成功を認定する可能性の移行にも対応している。勤勉と報酬との古い等式は、成功を、そのために誰かが行った勤勉の合計に還元するが、これが投機的資本主義の時代にもはや合わないのは明かである。この等式の比例関係にこそ、ブルジョワ的な労働倫理そのものがかかっているのであるから、この比例関係を拡張することによって救済しなければならない。それはつまり、冒すリスクの高さと収益の高さの等式であり、したがって労苦と報酬の比率である。ここで暗示されているのは、自己規律とは、利益を得るようにリスクを冒し、制御不可能なものに手を出しても、自分の生活と行為の制御を失わないようにするための基盤だということである。外面的にしか規律化されていない者は、リスクとのプレイには向かない。このプレイは、自分自身の企業家であることを意味しており、ゆえにすべては、内面化が成功することにかかっている。

「プレイ」という言葉は自己規律という観点から重要である。なぜならこの言葉はこの関連で非常に直接的に芸術的パフォーマンス、社会的パフォーマンス、経済的パフォーマンスを結びつけるからである。リチャード・セネットはまさにこの意味で、パガニーニやリストのような芸術家ヴィルトゥオーゾが19世紀に熱狂的に迎えられたことを説明している。公共圏への出現について極端に不安を感じていたブルジョワ的公衆は、このパ

フォーマーたちの自己経営管理の効率性を賞賛したとされる。賞賛されたのは、彼らが演奏を過剰に増進させて、技術的、感情的に制御を喪失する敷居にまで至るが、しかしそこで自己制御を保持したことである。ヴィルトゥオーゾ的な指揮者という、19世紀中頃に現れた新しいタイプの場合には、このように自己規律化された過剰さが組織論的な剰余価値を持つことが示された。なぜなら、指揮棒のヴィルトゥオーゾは聴衆に背を向けて激しく過剰なダンスを踊ることで同時に音楽的生産共同体を経営管理し、明らかにかつては決して聞かれなかったような強度の情熱へとオーケストラをもたすが、同時に厳密な集団規律を維持させるからである。まさにこれがきっかけとなって、1980年代に組織化理論は、カリスマ的でヴィルトゥオーゾ的な指揮者が管理職の理想であると喧伝した。それは、もはや命令し叱責することで指導するのではなく、自分自身の情熱的な没入と自己規律化された効率性との交差によってチームの人々を熱狂させ引きさらう人である。

リーダーシップ理論におけるこれまでで最も新しいパラダイム・シフトに対応して、集団的ヴィルトゥオーゾ性が位階制的指導構造にとってかわるところでは、この自己規律は分散する。ダイナミックな集団性が、全参加者の自己規律に基づいているために、位階制や固定的な指導者の地位を省く、そのようなケースのモデルは、即興的なジャズ・アンサンブルである。そうしたアンサンブルはオーケストラ的にプレイするのではなく、交替し*いわばソロの組み合わせによってプレイする*。あらゆるプレイヤーがヴィルトゥオーゾであり、このヴィルトゥオーゾ性を発揮できるし、すべきである。そしてそれをするために互いに自由を与えるか取り除くかは、チー

ム内部の相互作用に委ねられている。そのようなギヴアンドテイクが成立するところでは、音楽家は相互的にハイ・パフォーマンスへと上昇し、彼らが互いの交渉の中で自らの自己規律と他者の自己規律を信頼できれば、それだけいっそう即興は自由になり、なおかつカオスに陥ることもない。まさにこのダイナミズムを組織化理論は企業におけるプロジェクト・チームに転用しようとする。つまり、外的な規制は可能な限り少なくして、役職とプロセスもなるべく固定せず、そのかわりに可能な限り自由な相互作用によって、急速に変化するマーケットの状況に自発的に適応すること、そしてこれを個々の従業員の、ジャズ・ヴィルトゥオーゾ並みの自己規律を基盤として行うことである。これはしたがって、行為と相互行為における、自己規律とプレイの自由との関係のある特定のイメージであり、これは歴史的に最初は芸術的能力として出現し、後に社会的および経済的能力として発見ないし主張されているわけである。

勤勉と直接比例する規律化された成功の論理と、リスクの良好な自己管理に対する正当な幸運の贈り物としての成功の論理、このどちらもが排除するのは、*分不相応*の成功である。この経済上のスキャンダルも*同じく*、ロマン主義的なヴィルトゥオーゾ像に、つまり「偉大」な音楽家、舞踊家、俳優に完全に属していた。このような契機は、規律ないし自己規律に還元不可能であるにもかかわらず——あるいはまさにそれゆえに——他者への作用を度を越えて増大させるが、これがなければヴィルトゥオーゾの*貸借対照表*は完成しない。ベルリンで活動する演出家ルネ・ポレシュはこの分不相応なものの運命を2007年の作品*《赤ずきんちゃん》*で非常に的確に要

約している。彼はそこで古いソリスト的なヴィルトゥオーゾ・タイプを代表する女性をいきなりポストフォーダイズムのシナリオへ送り込んでいる。つまり、ドイツ演劇界の現代のヴィルトゥオーゾである俳優のゾフィー・ロイスが舞台に上がり、自分は魔力を失ったと嘆く。そして、分不相応の剰余とともに、彼女の成功を容易にしたものも失われてしまったので、彼女はここでまさに全く不愉快なことを行わねばならない。それは、他の誰もがしなければならないことである。それは、他人の価値評価を受けること、人々が彼女に熱狂するように働くことであり、ただヴィルトゥオーゾとして自由に振る舞うのではなく、賞賛という収穫を得るために真面目にがんばることである。ヴィルトゥオーゾ的芸術家はパフォーマンスのエコノミーの中で、もう一人の主権者〔至高者〕——これは至高のパフォーマンスという手段を通じて、主権者〔至高者〕という政治的地位をプレイによって篡奪する——の高みから、イタリアの哲学者パオロ・ヴィルノが「奴隷的ヴィルトゥオーゾ性」、つまり奉仕するヴィルトゥオーゾ性と呼ぶものの深みへと落ちる。ヴィルトゥオーゾ、つまり至高者として作用する者のカリスマは、労働能力についての拡張された計算のなかでは社会的・経済的量になる。この計算は、個人に幸運にも与えられた偶然的なものまで入力時に合算し、出力時には均衡を保つのである。そして、かつてスキャンダルの容易なものが非経済的なものの印を成していたところでさえ、残っているのは過度の自己規律だけであり、これは自らの容易さを剰余価値として自分で生産しなければならない。そして場合によっては、それがうまくいかないところでは、なんの価値もない。

自己規律を賞賛する言説一切の中に、ある種のアイロニーに守られて、自己規律の欠如の賞賛が入り込んできた。ドイツにおける最もよく知られた証拠は、去年出版されたカトリン・パッシヒとサッシャ・ロボの本『物事をうまくやるのに、少しも自己規律はいらない』である。このやや変わったハウツー本の核心には、いわゆる先延ばし(Prokrastination)がある。

外で道を歩いている大部分の人々、そして、他に大事なことがあるので道で出会うことのないもっと大部分の人々は、溜まっているあらゆる仕事をすべて延期している。彼らはゴミ出しをしないし、もう何ヶ月も廊下の壁紙を換えていないし、たまにしか郵便物を開けないし、あれやこれやの計画を終わらせないし、電話をかけ返さないし、第三四半期の表計算を完成させる期限をとうの昔に過ぎている。にもかかわらずかれらは必ずしも怠け者ではなく、皆がばかではないし、全体が悪人であるわけでもない。しかし彼らはきわめてしばしばこうしたレッテルと闘わねばならない。彼らは先延ばしprokrastinierenする。これはAufschiebenのより婉曲な言い換えである。“cras”（明日）がラテン語の単語crastinus（明日に属す）の語根である。従って、“prokrastinieren”（英語では1588年に初めて言及される）は字義通りに訳すと、明日に委ねるという意味である。そして明日までにはまだ長い時間があるかもしれないのだ。

二人の著者は、2004年にハンブルク大学心理学専攻において行われた研究を参照してい

る。それによると、アンケート回答者の77%が、「自己規律は難しい課題を耐え抜くために役に立つ」という意見であった。パッシビとロボはこうコメントする。

残念ながら自己規律はばかげた課題を耐え抜くためにも同じように役に立つ。つまり自己規律は、自分の感情、自分の知性、そして決断の自由を克服するための手段である。自己規律が必要であるということは、何かの間違っていることの明確な印である。[...] 致命的だが普及している過ちは、自己規律をモチベーションと混同することである。つまり、何かを意志することを自分自身に強制することである。これは不条理な構造である。

先延ばしは戦略的な延期ではない。つまり、行為者が可能性を投機的に増大させるために行う自己への貸し付け^{クレジット}ではない。そして先延ばしはベルリンの文化学者ヨーゼフ・フォーゲルが研究した「ためらい」でもない。つまり、同じ大きさの相互に敵対する力がいわば同一の瞬間に押しかつ引くために行う行為の中で起きる停滞や休止ではない。このためらいの危機的で危険な契機は、増進し、場合によっては増進しすぎた自己規律に由来する。これに対して、先延ばしとしての延期は、自己の規律によって規定された人間理解や社会理解にとって問題的であり、その理由は、この種の延期は行為に対してその内的危機として起きるのではなく、全く危機的ではない何もしない時間を経験可能にするからである。

パッシビとロボが記述する先延ばしは、第一に、高度の固有の複雑性を持つ社会における、結果の相対的な欠如^{プレイ}との戯れである。そ

のような社会では物事を延期しさらに延期することができる。なぜならそうしてもまず何も起こらないからである。長いこと何も起こらないことがしばしばであるし、そもそも全く何も起こらないというケースも決して少なくない。その理由は、社会学的に言うと、機能的な分化にある。つまり、社会がより多くの数のサブシステムに分割され、このサブシステムは私を全人格的に取り扱うのではなく、単に個々の行為ないし私の行為の個々の相だけを登録するということが理由である。例えば司法システムは、私が法律に違反し、その際に目撃され、実際に訴えられるか届け出をされるかしてはじめて、そしてその場合にのみ私に関わる。そしてまたその後も、警察や検察、裁判所の担当職員が私の事件を取り扱うまでは何ヶ月も何年もかかるかもしれない。よくありがちな論争で（しかしまたいくつかの政治プログラムでも）主張されるところによれば、国家と社会制度は、自己規律を支持するために必要な違反行為への制裁を効率的に行っていないため、自己規律の麻痺に責任がある。秩序から逸れる者は、それがもたらす結果を察知せねばならないというわけである。要求されている（そして部分的には既に試みられてもいる）ことは、処罰に関する事務処理の期限を犯罪者の時間感覚に合わせることによって、犯罪者自身の行為が意味する不都合を、その行為の帰結として体感させるということである。

これに対して先延ばしの重点は、たいていの行為あるいは不作為の結果の相対的な欠如を、われわれの生活の現実の一部として認めるということにある。たいていの場合に世界は応答せず、世界で起こることがまだ応答と言えるあいだはいずれにせよ応答しない、ということのうちにナルシスト的な侮辱を見

るのではなく、「良い先延ばし」の戦略は、環境世界の限定された注意を自由の空間〔活動の余地〕として探索し利用することを目指す。問題は、ジョルジョ・アガンベンが「世俗化」という語に与えた意味において、延期を世俗化することである。つまり、過ぎ去る時間をその形而上学的規定——これは信用の原理においてすらまだ有効である——から分離することである。過ぎ去った時間を留保なく世俗的な領域に回収し、超越について思弁（Spekulation）〔投機〕することなく、つまり期待することなしに、いまここで使用することである。

良い先延ばしが要求することは、プロジェクトの秩序への信仰と手を切ることであり、それはこの信仰のなかでもとりわけ、宗教的な終末論と歴史目的論の遺産を近代的時間の全体的内在性のうちで管理している部分にあてはまる。それはとくに、あるプロジェクトが樹立すると主張するようなタイプの共同体——そこではこのプロジェクトがプロジェクトそのものの代表を僭称する——から逃れることである。自己規律の欠如の肯定的な価値転換のための道の第一歩は、いわば仏教的なエゴイズムである。それによれば、われわれは共同で何かを企てることが出来るが、私はそれをまず一人で放棄しよう、と言われる。先延ばしは共通のリズム——これは共通の目的によって自らを権威づけようとする——による束縛の終わりを宣言する。先延ばしは、ロラン・バルトが固有リズムという概念によって論じた状態へ向かって漂流する（興味深いことに、再び宗教的領域に由来する概念である——固有リズムとはある種の修道院生活の仕組みであり、そこでは義務的な日課もなく、祈りや食事や睡眠の決まった時間もなく、そもそもほとんど集会がない——そして

バルトの場合も同じく、固有リズムを世俗化し、これを世俗的な使用に合わせる事が目指されている）。ここで固有リズムとは孤立ではなく、行為のリズムが場合に依じて同期化するが、にもかかわらずこのリズムは多様に異なり続ける、ということである。

それでは自己規律なしにどうやってうまくやるのだろうか。パッシヒとロボが提案するやり方は、特定のことをしたくないという気分を利用して、他のことを楽に行うというものである。彼らはアメリカの哲学教授ジョン・ペリーを引用している。ペリーは自身のウェブサイト（structuredprocrastination.com）に掲載したエッセイにおいてこう説明している。自分はこのエッセイを長い先延ばしの後に書き始めたが、それは今時間があるからではなく、これを書くことで、宿題の添削、申請書の評価、博士論文要旨の査読といった、他の多くのはるかに厄介な義務から遠ざかれるからである、と。おそらく、われわれはみなこの効果を知っているのではないだろうか。すなわち、より困難だったり、厄介だったり、退屈だったり、何かの仕方で不愉快だったりする他の課題があらわれるとたちまち、最初は困難に見えたことが容易になるのである。

おそらくこの洞察は楽しいけれども凡庸だと思われるだろうが、これは既にノヴァーリス〔1772-1801、ドイツ初期ロマン派の詩人、哲学者〕に見出されるヒントを延長、あるいは再生している洞察である。ノヴァーリスはわずかな例外を除いて、自分の思考を簡単に短い断片やメモの形で記録することに専念しただけでなく、『一般草稿』という断片ないしメモの集成のなかで、行為の容易さについての理論の概略も述べている。いかなる状

況も軽い不均衡によってダイナミックに規定されている、というのが、あえて言えば、ノヴァーリスにおける体系的な要点である。いかなる状況もそれ自体のうちに傾向を持っている。ノヴァーリスが「一切の実践的なものの学説」と呼んだもの、つまり経済学では、この傾向を解説し、もし行うならば容易に〔軽く〕なるようなものから行為を始めることが重要である。「器用にそして容易にできること、そういうものに対して人は傾向を持つ」と『一般草稿』の断片29番に言われる。そしてこの単純な文が、一つの行為理論の核心であり、この理論は、行為を障害の克服や可能性の条件の充足として考えるのではなく、行為を客観的な（自然科学的ないし社会的に対象化された）難しさ〔重さ〕から考えるのではなく、主観的な容易さ〔軽さ〕から考えるのである。

そして実際、自己規律を欠いた実践の理論は、困難なものの自然化や社会的対象化に素っ気なく背を向ける。この自然化や社会的対象化は、まず克服されねばならない困難の定まった秩序があるとか、行為が実際に遂行可能になる前に充足されねばならないような、義務的な一連の可能性の条件があるとか、われわれに信じ込ませる。自己規律を欠いた実践は、客観的な困難さの見せかけによって意志に条件を付けることを覆す。モチベーション・トレーナーの常套句は、「何かを本当に意志すれば、それは実現する」だが、自己規律を欠いた実践はこれを逆さにして、以下の洞察に変える。すなわち、何かを容易に実現するならば、そこに意志の自由を発見できる、この自由はさしあたりはフリー・ハンド（自転車の手放し運転のような）ということであり、これは、行為においてフリー・ハンドで何を行うか、という問い

を、行為のうちに導入する。

このようにより容易なものを優先するという意味では、規律を欠いたやり方は規律化の措置とも完全に同盟を結ぶことができる。さてしかし、自己規律を欠いた者を助けるのは、規律化の措置のまさに外面である。なぜならこれによって、自己規律を欠いた者は何かを行うが、同時に、容易なものを追求するという彼の傾向が承認されるからである。パッシビとロボはロッシーニの手紙を引用しているが、そこで彼は、劇場監督によって缶詰にされたために、自分がいかにして初日の前日に序曲数曲を作曲したかを報告している。

私は四人の道具係に見張られた。この四人は、私のオリジナルの楽譜を一枚ずつ窓から投げて、書き写そうと下で待っている複写係に渡すという指示を受けていた。そして楽譜用紙が無くなる場合には、私自身を窓から投げるという指示を受けていた。

それどころか、ハインリヒ・フォン・クライスト〔1777-1811、ドイツの劇作家〕は「話しながら考えを次第に仕上げることについて」において、この種の処置のもっとより危険なヴァージョンを考えている。つまり、彼は愛している（そして欲望の対象でもある）妹に、いわば絶えず我慢の限界にある聞き手の役を割り当てた。つまり、彼が中断してあまりにも長く沈黙する場合には、彼に対して見向きもしないと脅迫することによって、思考を語りながらまとめるように彼を強制したのである。ここで規律化は何かを実現するために役立っているが、自己規律は欠如したままである。この措置は、自己規律を欠いていることが意味する過剰を、それと相補的な、規律の過剰と出会わせる。そしてその意味

は、自己規律の欠如のうちに過剰な剰余があるという事実を規律化の措置が承認しているということである。たとえこの過剰な剰余がある状況では不活動として現れるとしても。自己規律を目指す学習プログラムとは異なり、そのような措置は、自己規律の欠如を、自己規律の不足、つまり自己のうちの欠損として定義するのではなく、阻止されたものや放置されたものに、それらが剰余として現れるところで応える。

自己規律の欠如のポジティブな効果を楽しむためにも練習が必要である。しかし、例えば哲学者のペーター・スローターダイクが最新の著書『生活を変えろ』においてまさしく高級文化的自己規律のパンフレットを書いたのとは異なり、パッシヒとロボは、練習がまずは楽しい反復であるところから始めることを勧めている。これは行為のパターンを繰り返したどることであり、これが楽しいのは、最初から少なくとも部分的には成功しており、最初からいくらかの自由をもたらすからである。規律化ないし自己規律化された練習では自由はやっと最後になってから、あるいはかなり遅くなってからでなければ見通せない。

トレーニングプログラムは、外からの規律化と自己規律化とのリレーとして自由を約束するが、この自由はまさに再獲得された至高性の自由である。練習する者は自発的に強制に服し、現実的ないし想像上の練習指導者という他者と対話しつつ、主人と奴隷の弁証法に入っていく。そしてヘーゲルが言うように、いつか「自立性へと転換する」。奴隷は、奴隷としての存在を自分の存在の形式として受け入れ、この存在形式を耐え抜くことによって、最後には主人よりも優位に立ち、「主人の主人」になる。これが、奴隷的な至

高性、自己規律化された者の自由についてのヘーゲルの正確な（そして全く十分におぞましい）定式である。この転換がいつ起こるのか、ということはヘーゲルにおいても開かれた微妙な問いに留まっている。転換が決して到来しないとしても、いずれにせよ私は自分の過失でそれを取り逃がしたことになるだろう。そしてパッシヒとロボは、冷笑的な無邪気さで、まさにこれが自己規律化された練習の普通の事例であると解釈している。ダイエットによってやせるのと同じぐらい多くの人々が攻撃的な自己トレーニングによって自由になる。

他方で世界には、大いなる献身によって高度に複雑な活動を習得する人々がたくさんいる。これは、日常語で軽蔑的に、ゲーム潰けになる（Daddeln）とか、ちょこちょこいじる（Frickeln）とか、ギャンブルに打ち込む（Zocken）とか、いじり回す（Rumspielen）といわれるものによるのだが、これは組織化理論から見ると驚くべき上昇可能性を持った練習形態である（そして実際に最近では組織化の理論家から、「正規の」学習プログラムとして道具化できないかという観点で見られている）。このように練習されるものは、原則として誰もができるものである。人々がここで発展させる技能は、パフォーマンスな「一般的知性」に属する（天才的な例外的才能や、特に高度の初期条件の充足は求められていない）。この練習活動はすべて、傾向性（気分）に従う。つまり、容易なものから出発し、すぐに成功するものから出発し、まさにこの容易なものうちにしだいに困難を統合するのである。われわれはこの活動の多くを直感的にいわゆる「サブカルチャー」に割り当てることだろう（この活動は部分的にはそれを自己理解とした）。ただしこのレッテルを貼って

いるものは、これまでのところは、いわゆる誰もができることや誰でも実践的に容易にアクセスできるものの構造的な価値低下に他ならない。この社会では、固定可能で一般化可能な基準がないために、とりわけ現実的ないし仮象的な障害を、現実的ないし仮象的に克服することが卓越性の定義なのである。

しかし、「非-奴隸的ヴィルトゥオーズ性」(もう一度ヴィルノの概念に立ち返るならば)への一歩はおそらく、誰もが出来ることの価値転換を通るだろう——「誰も」と可能との解釈の変更によって——なぜならパッシヒとロボによる出発点の興味深い帰結は、ただ楽しむのために熟練した無造作なヴィルトゥオーズは、規律の点では機能不全の怠け者に他ならないからである。彼は、同じ関係の反対の解釈を、その効果として生み出す。彼はその振る舞いによって、いわば価値上昇のス

パイラルのうちにあるが、これは、自己規律のない者の否定的な例が語る価値下落のスパイラルを、単純に逆に回転させることによって生じるものである。

したがって、自己規律の支配下における解放は、誤った自己イメージをふるい落とし、その下から本当の自己、つまり自己との関係の真理としてのためらいを出現させることではないだろう。むしろそれは意識的な操作の効果、なにか全く人為的なものであろう。つまりそれはニーチェの意味での解釈の効果であろう。力の関係の価値転換、それも自己のうちではなく、私の生が位置する状況のうちでの力の関係の価値転換である。パッシヒとロボのメッセージは、「人生を変えろ」ではなく、「人生の解釈を変えなさい、それをうまくやれる限りで」というものである。